

大地湾遺跡について

武 藤 祐 浩

はじめに

平成4年度、秋田県は中国甘肅省との友好提携10周年を迎え、文化面での人事交流を進めて行く取り決めが交わされた。それを受けて平成4年度には甘肅省側から当埋蔵文化財センターに甘肅省博物館（以下、省博と略）の王琦氏が来日し、研修した。翌平成5年度、私は交換の研修生として訪中し、中国甘肅省蘭州市にある省博と、隣接地にある甘肅省文物考古研究所（以下、考古所と略）^(註1)において研修を受けた。平成5年6月1日に出国し、6年3月23日に帰国したので、延べ296日、足掛け10カ月である。研修の内容については、前もって3点のテーマをお願いしてあった。私を受け入れてくれた省博側でも希望を考慮して対応してくださった。

私が研修をお願いしていた内容の一つに「新石器時代、彩陶の発生期について」というテーマがある。これは、平成2年に秋田市で行われた中国甘肅省文物展に出品された三足彩陶鉢^(註2)に施された「交叉縄文」に興味をもったためである。研修した内容では、この彩陶鉢を出土した大地湾遺跡について最も多くの時間を費やし、また丁寧にご指導いただいた。

ここでは、まず大地湾遺跡についての研修の概況を報告し、遺跡について紹介する。

1 研修内容と経過

研修には、講義の受講および文物についての学習と、省内外の博物館あるいは遺跡の見学があった。講義は省博あるいは考古所の先生方によるもので、一回が2時間前後。原則的に秋田に研修に来られた王氏、あるいは省博の陳剛氏の日本語通訳をとおしてである。受講した講義は9講義である。講義内容は表1のとおりであるが、それぞれが豊富な内容であった。なお「銅器の修復と保護」では実技研修が主体となった。また、見学地についても表2のとおりである。地方の小さな博物館の状況について研修することができたが、同時に見学地への旅行では、農村の様子や地域の特徴にふれる良い機会でもあった。それらの研修のほかに、秋田県での発掘調査の様子をスライドを用いて説明し、省博あるいは考古所の方々と意見交換を行ったり、また日本語教室を開いたりもし、人々との交流を深めることができた。

講義は7月1日に開始された。彩陶の研究者である張朋川先生による「甘肅遠古彩陶文化」

表 1 受講講義一覧

講 義 名	期 日	指 導 者
甘肅遠古彩陶文化	7月1日～3日、9月20・22・29日、3月8日	張朋川先生
大地湾遺跡及大地湾文化考古	7月5日～3月17日	郎樹徳先生
甘肅文物行政管理与考古・博物館機構	7月23・27・29・31日、8月2・4・6日	初世賓博物館長
甘肅漢代長城和簡牘考古	9月7・8日	徐樂堯先生
甘肅歷史地理沿革和絲綢之路	9月9・10日	徐樂堯先生
甘肅旧石器考古	12月1・4・10・15・17・18日	張行先生
石窟發展史与石窟芸術	12月21・23・24日、3月10日	張宝玺先生
中国歴代磁器	1月24・25日、3月1・2・3日	楊徳安先生
銅器の修復と保護	1月31日～3月10日	薛俊彦先生・馬清林先生

表 2 見学地一覧

巡 見 先	期 間	見 学 地
北京・西安	6月1日～12日	故宮博物院・長城・定陵博物館・首都博物館（北京孔廟） ・清代の演武庁・大鐘寺古鐘博物館・周口店北京猿人展覽館 ・大葆臺漢墓・陝西歴史博物館・半坡遺跡・碑林・法門寺 ・茂陵博物館・兵馬俑坑博物館・大雁塔・小雁塔
甘肅省甘南方面	8月12日～15日	炳靈寺石窟・臨夏回族自治州博物館・拉卜楞寺
甘肅省平涼地区 ・天水市	11月5日～12日	平涼地区博物館・平涼市博物館・崆峒山・王母宮石窟 ・涇川縣博物館・南石窟寺・庄浪縣博物館・大地湾遺跡 ・麦積山石窟・天水市博物館（伏羲廟）
甘肅省酒泉地区	11月20日～27日	敦皇市博物館・莫高窟・橋湾城・嘉峪関城
四川省成都 ・重慶	12月26日～ 1月6日	四川省博物館・四川省文物考古研究所 ・成都市博物館（大慈寺）・杜甫草堂・武侯祠・都江堰 ・重慶市博物館・米帝蔣軍犯罪行為展覽館・渣滓洞
甘肅省武威市 ・張液市	2月18日～23日	古浪縣博物館・武威市博物館（文廟）・大云寺・雷台漢墓 ・磨嘴子遺跡・山丹縣博物館・河西走廊沿いの長城 ・張液市博物館（大仏寺）・馬蹄寺石窟
北京	3月18日～22日	北京大学賽克勒考古與藝術博物館

からである。これによって大地湾一期文化についての基礎的な内容を学習する。翌週7月5日には、考古所の大地湾遺跡整理室（以下、整理室と略）へと案内され、整理室での研修が始まる。まず王氏の通訳で、考古所の郎樹徳先生から大地湾遺跡の概要説明を受ける。その後は、出土遺物の実測とその特徴についての学習である。予定期間は6週間ほど。しかし、図化や採拓あるいは観察に時間を費やす内に、予定期間はたちまちに過ぎてしまった。表1のとおり種々の研修をこの後に行ったが、それらの研修の合間は都合のつく限り整理室に出入りさせていただき、大地湾遺跡についての学習を続けた。結果的に、帰国を間近にひかえた3月中旬までの約8カ月間が大地湾遺跡の研修に充てられたことになる。

大地湾遺跡についての研修で実測した遺物は土器・石器・骨角器・貝器などの代表的なもの総数132点である。土器の作図は、4分の1で行った。小縮尺で作図する点は整理室の方法にならなかったが、内外面の表現位置は左に外面・右に内面としたため整理室のものとは逆である。他

の遺物は原寸で作図した。普通、陶器の拓本をとることは少ないようで、採拓は油墨を用いない方法を考古所の周珮珠先生に指導していただいた。遺物実測の実習を終えてからは、発掘調査時の遺構図面にあたり、特に住居跡の変化について研修した。また、並行して大地湾一期の土器についての観察も行った。

11月の上旬には甘粛省東部の巡検に出発し、同9日には待望の大地湾遺跡を見学させていだいた。整理室では住居跡の炉の形態について研修していた頃である。住居跡群には炉跡にくっつかの形態があるが、実際の遺構あるいは復元された住居でそれを確認することができた。また、日本人としては初めて、外国人としても2人目の見学者とのことで、本当に貴重な体験をさせていただいた。

大地湾遺跡はこれまでに10地点の発掘調査が行われている。一部は既に簡報などで紹介されている。現在は、本報告のために1995年末を目処に整理作業が進められており、私が研修していた頃も、種々の作業や検討が行われていた。そうした作業の節目に、考古所は北京大学の嚴文明先生を招いて、遺跡の内容と整理作業の進め方の検討を行った。その際、嚴先生は考古所で大地湾遺跡に関しての講演をなされたが、私も運良く聴講させてもらうことができた。3月10・11日のことであった。理解できた点が多いとは言えないが、研修した内容を振り返る意味で良い機会であった。

なお、7月6日に実測を始めてからの研修には通訳はいなかった。会話は、とにかく理解しようとして聞き入ることと、とにかく伝えようと表現すること、あとは筆談。会話の成立しないこともしばしばあったが、遺物を前にしての交流では意志の疎通がしやすくなることも多かった。

2 大地湾遺跡について

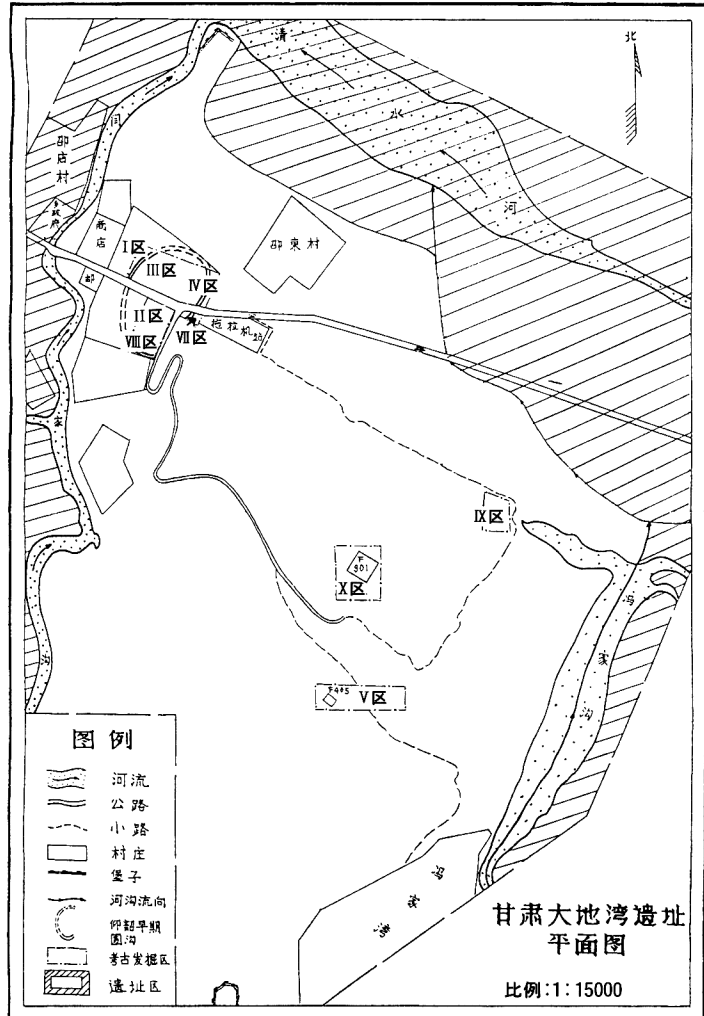
2-1 中国新石器時代の仰韶文化と先仰韶文化

大地湾遺跡について述べる前に、その年代観と文化内容を確認するために仰韶文化について簡単にふれておきたい。

仰韶文化は中国で最初に発見された新石器文化である。名称は、1921年スウェーデンのアンダーソンが発見した河南省渾池県仰韶遺跡に由来する。赤色地の土器に黒で彩色した彩陶を特色とする。粟作農耕を主とし漁撈や狩猟も盛んであり、家畜の飼育も始まっていたとされている。年代は放射性炭素14年代（以下の年代は放射性炭素14年代により、今からおよそその年数とする）で6,800年前から5,000年前であり、前後の2期、半坡類型と廟底溝類型に大別されている。黄河中流域を中心として山西省南部・河南省西部・陝西省などに多数の遺跡が発見されているが、特に黄河支流の渭河流域では陝西省臨潼県の姜寨遺跡・西安の半坡遺跡あるいは宝鶏北首嶺遺跡などが発掘調査されており、著名である。半坡遺跡では、発掘調査した部分に巨大

な屋根を架けて半坡博物館としている。半坡遺跡・姜寨遺跡の調査では半坡類型期の環壕集落の様子が明らかにされたが、大地湾遺跡においても集落跡の調査がなされている。

1970年代後半の発掘調査では、黄河流域における仰韶文化に先行する遺跡の存在が明らかにされた。河南省新鄭県裴李崗遺跡・河北省武安県磁山遺跡であり、裴李崗・磁山文化と呼ばれている^(註4)。年代は8,300年前から7,600年前とされる。遺構として竪穴住居跡・貯蔵穴・共同墓が検出さ



れている。遺物では 第1図 遺跡と調査区 (學術座談会資料から郎氏の許可を得て掲載) 磨製で大型の石皿と磨石が特徴とされる。土器は手づくね成形・低下度焼成によるもので三足器が多く、彩陶は1片しか出土していないという。磁山文化については「中原最古の農耕文化」という評価があり、これらの文化は採集・漁撈・狩猟に依存しながらも定住農耕を行っていたものとされている。こうした仰韶文化に先行する遺跡は陝西省から甘肅省東部にかけても見つかっており、大地湾遺跡からも豊富な資料が出土している。

2-2 大地湾遺跡の概要

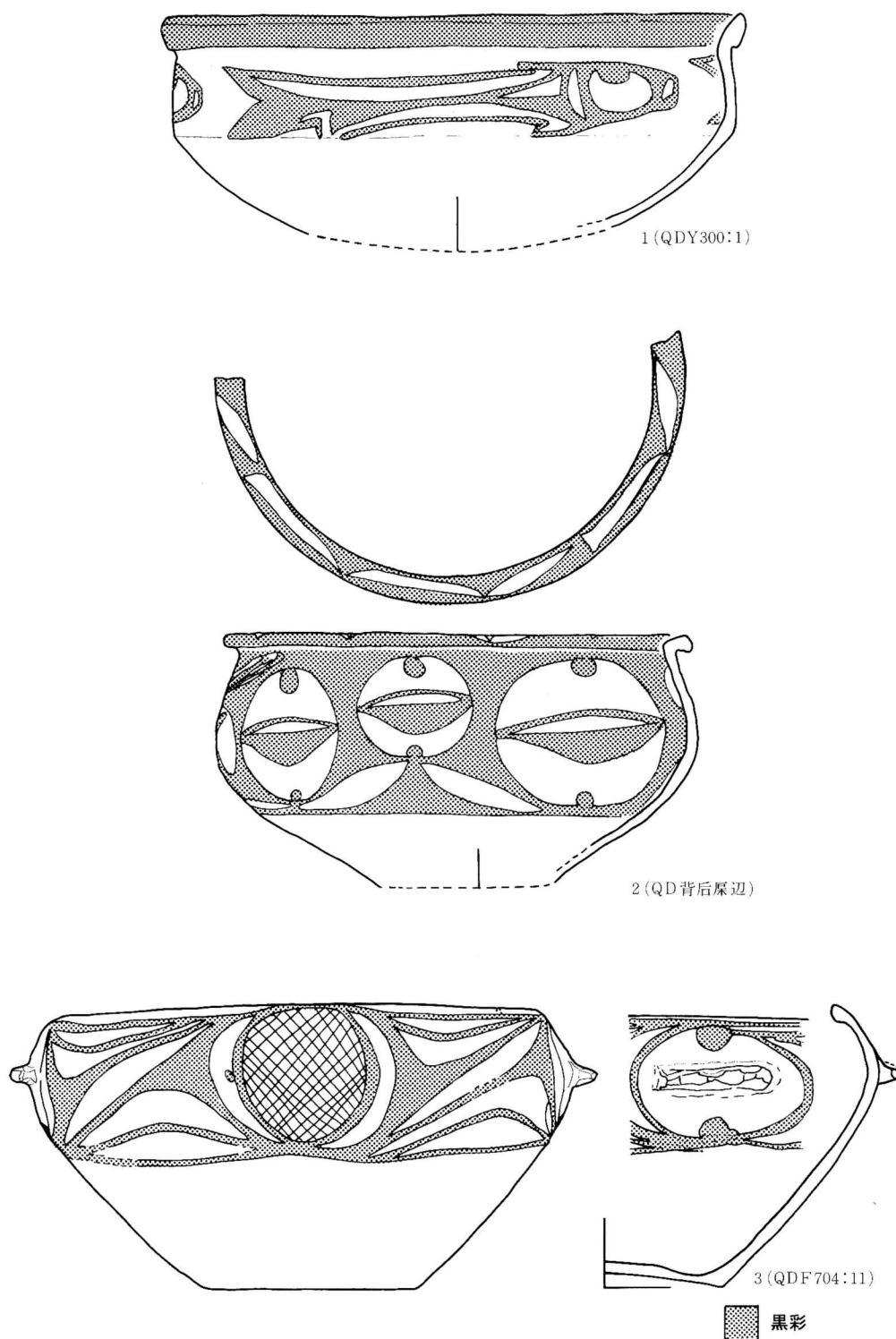
大地湾遺跡は、甘肅省秦安県五营郷邵店村の東に所在する。およそ東経106度、北緯35度である。麦石山で有名な天水からは北北東に約50kmである。遺跡は渭河の支流にあたる清水河の南岸に立地している。清水河河床の標高は1,450mであるが、遺跡は河床との比高差10mほどの河岸段丘面から、その南側に緩やかにつづく標高1,670mの山の頂部まで広がっている。一方

東西は清水河に注ぐ深い沢に区切られており、全体の広がりには推定面積で1,100,000㎡に及ぶ。

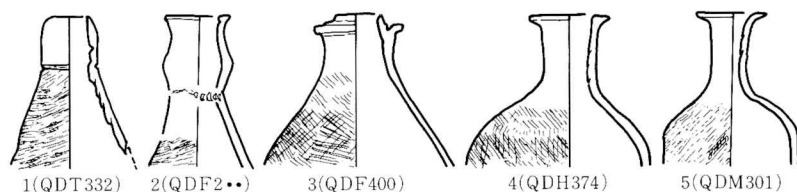
この遺跡は甘肅省博物館また秦安県文化館により、1978～1984年にわたって10地点が発掘調査されており、その面積は13,700㎡である（第1図）。調査ではおよそ3,000年間におよぶ5時期の文化層が確認されている。今から7,000～8,000年前の大地湾一期、6,500～6,000年前の仰韶早期、6,000～5,500年前の仰韶中期、5,500年～5,000年前の仰韶晩期、そして4,800年前の常山下層期のものである。大地湾一期から仰韶晩期までの文化層は、河岸段丘上の調査の際に層位の上下差として確認された部分がある。また、河岸段丘上では遺構の重複の多い部分があり、その重複からも新旧関係が検証されている。以下に仰韶晩期までの土器の変化と集落の変遷について概観する。

2-3 仰韶期の土器について

大地湾一期には「交叉縄文」を特徴とする土器がある。これについては詳細を後述するが、この段階に鉢の口縁部に紅色の彩色を施す土器がある（第4・5図）。第2図1は黒色で魚文を描いた「圓底彩陶盆」である。この土器は、本来丸底であるが底部を欠損している。器形及び文様の特徴から半坡類型のものであり、大地湾遺跡仰韶早期の土器である。先の大地湾一期の土器から仰韶早期の土器への変化に関して、その途中段階を示す土器は今の所明瞭ではない。但し、鉢ないしは盆が丸底である点と口縁部あるいは体部上半に彩文が施される点からは一連の系統を引くものと考えられる。大地湾遺跡の仰韶早期の「彩陶盆」には先の魚文の抽象化したものも多く、編年上やや新しい段階に位置づけられるものとされる。第2図2は「曲腹盆」である。口縁上端が外反する。口縁部から体部上半が膨らみ、体部下半が緩く湾曲して平底の底部にいたる器形を呈する。「曲腹盆」の体下半部の湾曲がS字形に近く屈曲する器形は、廟底溝類型に特徴的であるが、第2図2の器形もそれに通ずる。大地湾遺跡の仰韶中期の土器である。大地湾遺跡ではこの段階で平底のものが多くなるが、まだ丸底のものも併存する。なお彩文のモチーフに草花的なものが多い。^(註5)第2図3は仰韶晩期とされる「斂口盆」である。口縁部が内湾し、体部の上部で最も膨らみ緩やかに底部につづく器形を呈する。底部は緩く凹む。この段階にも先の「曲腹盆」がみられる。また基本的に平底である。彩文には格子目のモチーフが用いられる。彩陶盆に見られる仰韶期の変化は以上のとおりである。仰韶期の彩陶は早期から中期に向かって量を増し、その後減少する。彩陶の器種には鉢・盆・壺・瓶などがあるが、葫芦瓶は早期に特徴的器形である。以上の彩陶の胎土にはきめの細かい粘土が用いられる。彩色されない部分は無文である。無文部の色調は基本的に赤褐色から橙色であるが、中期以降に灰色のものが現れ、晩期にはその量が増える。また中期から、一度白色の下塗りをして彩色を施すものがある。晩期の「四足鼎」は、その方法を用いている。



第2図 仰韶期の土器（縮尺1／4）



第3図 尖底瓶口頸部の変遷（縮尺1／8で口頸部のみ図化）1から5へ変化する

彩陶以外の器種として罐・尖底瓶などがある。特に尖底瓶の口頸部の変化（第3図）も時期差が明瞭である。これらの胎土には砂粒が混入されるものも多く、体部に撚糸文の施されるものも多い。器種構成の点では、中期には甌や器座・杯形器などが出現し、晩期には調整用轆轤に用いられる「浅腹盤」もある。

なお晩期の「901号房址」（以下「F901」と略）からは上述の四足鼎のほかに、「異形器」とされる座取り状で穀物のはかりに用いられたかのようなものもあり、遺構の性格を考える上でも注目される。^(註6)

2-4 遺構について

大地湾一期の遺構としては、堅穴住居跡・土坑墓・土坑が検出されている。河岸段丘面の河側（北より）に分布し、その広がりには約4,000㎡ほどである。3軒の堅穴住居跡が東よりに、また土坑墓がやや西よりに分布する傾向がある。堅穴住居跡は平面形が2.5mほどの円形で、出入口と考えられるスロープが壁沿いにあり、柱穴は堅穴の周囲に検出されている。堅穴内の炉跡は明瞭ではない。土坑墓は少なくとも16基検出されている。平面形は基本的に長方形である。3地点に2～4基まとまる部分があるものの、全体に散在し共同墓地といった状況とはいえない。ただし埋葬頭位については西頭位のものが多い中に、3基だけ北頭位のものがある。

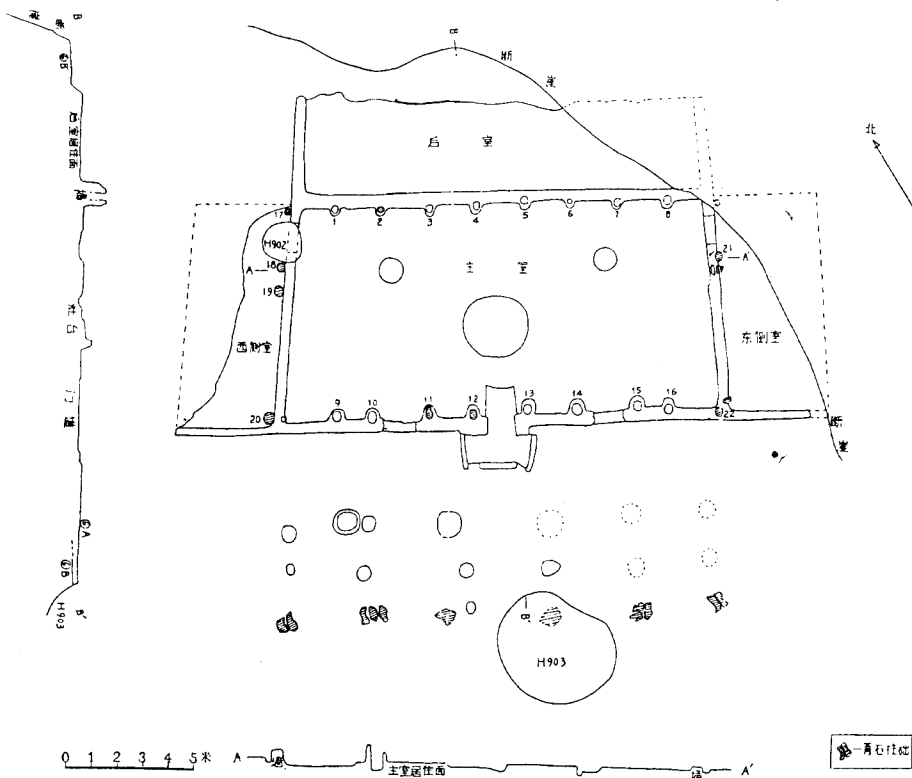
仰韶早期の遺跡の範囲は、河岸段丘面の南北150×東西180mほどである。中期の遺構の広がり、南側に続く山の下部で発掘調査が行われていないために明確ではないが、遺物の分布や耕地に切り崩された部分の断面の観察から、南側の山の途中までは広がっているものと考えられる。さらに晩期には山の上部までの南北1,000×東西1,100mに拡大する。

仰韶期の遺構としては、住居跡・土坑墓・土坑の他に窯跡が加わる。また河岸段丘部分では、大きな溝跡も検出されている。

早・中期の住居跡は基本的に方形あるいは長方形の堅穴住居跡である。堅穴住居跡の大きさは、一辺4～6m前後のものが多いが、一辺が8mを越える大きなものもある。壁から床は「草泥土」で整えられる。堅穴の一辺には緩く傾斜して床につづく出入口が付く。出入口よりには炉があるものが多い。炉にはいくつかの形態がある。整理室の各遺構の時期の検討が途中であったため明確ではないが、継続的变化に留意してみると、以下の変遷が予想される。古い段

階の炉は、床を掘り窪めたもので平面形が瓢箪形を呈する。炉底面の出入口とは反対側に火種保存用とされる穴があり、土器が埋設されているものも多い。炉の平面形は次第に円形のものへと変化する。併せて、出入口の屋内側の端から炉へ通風用とされるトンネルを伴う構造となる。また、炉の周囲に床より僅かに高い壁が作られるようになる。この段階も火種保存用の穴があるものが多い。続いて、炉の周囲の壁が高く作られ、床の掘り込みの顕著でないものとなるようである。主柱穴は、出入口から炉をとおり線を中心として対象位置に2個のものと、床の中央よりに方形に4個のものなどがあり、前者が多い。また、壁際に一定の間隔で柱穴が巡るものがあるが、柱を壁の芯材とした痕跡とされる。

晩期には平地式の住居が多くなる。前述の出土遺物からも特殊な建物である可能性があり、適当な例ではないが、1983～84年に調査された「F901」についてふれておく（第4図）。この遺構はX区とされた山の中腹部分で検出された。主室・東西の側室・後室及び前面の附属建築からなり総面積約420㎡である。主室は16×8mで南辺中央に正門、その左右に脇門がある。主室の左右奥に側門があり、側室へつながる。床材には軽量コンクリート状の^(註7)ものを用い、「白灰面」といわれる床を作り出している。壁は芯材に「草泥土」を数層に塗ったもので、厚さ40～45cmである。正門より内平面形が円形を呈する炉がある。炉は周壁を巡らせたもので、



第4図 F901房址（『文物』1986年第2期より）

周壁の残存高でも床から50cm、その厚さは40cm前後、炉全体の外径は2.6m前後である。主室奥より径90cmほどの主柱が2本あり、南北の壁に沿って壁柱が16本ある。いずれも「草泥土」で塗り固められている。主室前面には柱穴などがあり、一連の遺構ととらえられる。なお、やはり山の中腹で1982年に調査されたV区でも床が「白灰面」となる住居跡が調査されている。こちらは単室の住居跡であるが、その床面には黒色の画が描かれていた。この「地画」が省博の展示室に展示されている。

以上の住居跡を中心とした仰韶期の集落の変遷についてであるが、早期には河岸段丘上の遺構の分布状況から、竪穴住居跡と溝跡からなる環壕集落が成立していたものと考えられる。住居跡群では出入口の方向に着目すると、出入口が同一中心に向かう住居跡群でいくつかのまとまりを抽出しうる。ただし、そのまとまりを示す住居跡群間の時間差及び住居跡群と溝跡の関係については研修時点では明瞭にならなかった。墓域については、早期でも比較的古い時期の土坑墓が一つの住居跡群の中央にまとまっており、一方土器棺墓は住居側に点在している。それ以降の墓域は明瞭になっていない。なお、平成7年1月時点での郎先生の見解^(註8)では、早期に2段階の集落の変遷が考えられ、古い段階には土坑墓群を囲む環状集落があり、その後、少なくとも4つのまとまりを示す住居跡群で構成される集落へ発展するとされている。こうした変化については姜寨遺跡や半坡遺跡においても確認されていない点であり、本報告が待たれる。

仰韶中期は、前述のとおり不明な点が多いが、集落が南側の山の部分まで拡大しているものと考えられ、また仰韶晩期には山の上部まで遺跡が拡大する。先の「F901」は清水河流域の見通しの良い所にある。上述の遺構の構造や鼎などの出土遺物からは、流域内での中心的建物であった感がある。この点では、仰韶晩期の段階がすでに社会的にかなり発展していることを示すものと考えられる。

3 大地湾一期の土器について

ここでは、「彩陶の発生期」というテーマに関して、大地湾一期の土器群について報告する。

大地湾一期の土器は、前述のとおり仰韶期より古く位置づけられる土器群である。胎土には細砂粒の混入されたものが多い。器厚は薄く4mm前後のものが多く、焼成は良好である。焼成後の色調として、基本的には赤橙色から赤色を呈するが、焼き斑で赤黒色から赤灰色となる部分も多い。破片断面が層状をなしたり、器内外面に部分的な層状の剥落がみられたりあるいは焼き膨れのあるものがあり、成形方法は型を利用したものと考えられる。型を使用したつくり方に関連して、型そのものの可能性のある円錐台形の土製品が1点出土していることは興味深い。この点から、一応内面に型をあてる方法であったものと推測される。ただし、後述する「球腹壺」の口頸部では、成形時に外側からあてた型と考えられる土製品もあり、部分的には

外側からあてる型もあるようだ。なお、円錐台形の土製品が1点しか無い点から、型自体は木あるいは植物質の素材であったのではなかろうか。また、器内面の調整が明瞭に観察できるものもあり、成形後に型がはずされているものと考えておきたい。

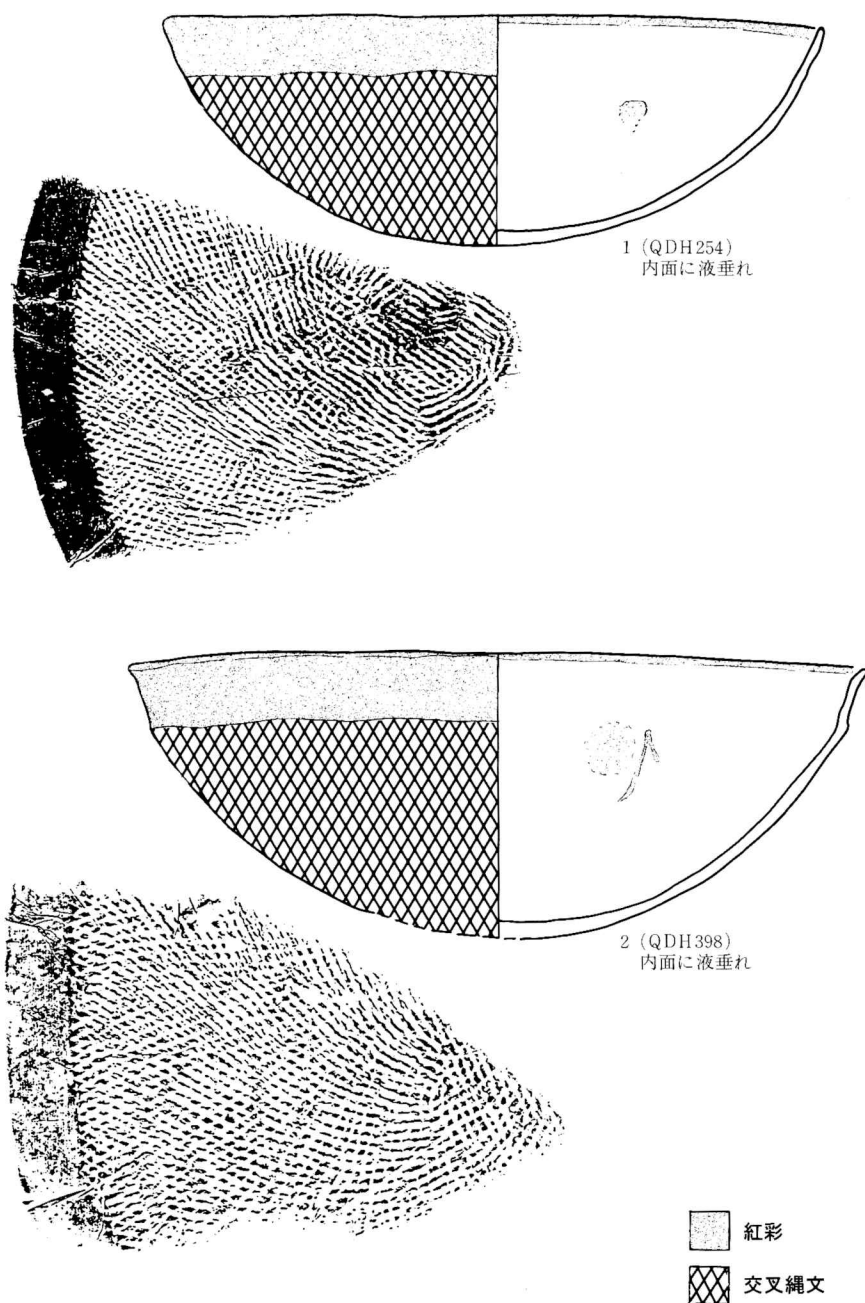
器の外面は基本的に交叉縄文の施されるものと無文のものがある。交叉縄文は、棒状の軸に撚り紐を巻き付けたものを原体とし回転施文したもので、いわゆる撚糸文を重複させたものである。例えば丸底の浅鉢形のものでは、器を伏せて底部から口縁部側にむけて、時計方向あるいは反時計方向に原体を回転させ、次に前とは逆方向に回転施文する。ちょうど調理用のボールを伏せて、底から円を描きながら撫で下ろすような具合である。このため一回の施文の長さが比較的長い。中には2度目の施文がなされないものがあり、撚糸文の施文方向が明瞭なものもある。また深鉢形のものでは、一回の施文の長さが短いものが多いが、やはり撚糸文を重複させて交叉縄文としている。無文のものの器面は平滑に仕上げられている。

主要な器種として、「圓底鉢」・「三足鉢」・「圈足碗」・「深腹罐」・「三足罐」・「球腹壺」があることが指摘されている。三足器は「圓底鉢」や「深腹罐」に脚部を差し込んだものである。このため脚がついた部分の内面が僅かに内側に膨れたり、時には脚の芯が内面からわかるものもある。基本的に、脚は棒状の芯に薄く粘土を付けたものである。先端が円錐状に尖るものと、馬蹄形状になるものなどがあり、撚糸文の施されるもの・無文のもの・後述する彩色されるものがある。また圈足器は環状の台を付けたものである。身の成形後に取り付けられており、取り付けられる身の方の底部が凹んだり、取り付け部分の上側に工具による刻み込みの跡が残るものがあり、台部を欠失していてもそれと判断できるものがある。

「圓底鉢」・「三足鉢」には紅色の彩色を施した彩陶がある。彩色は帯状で、施される部位は、器外面口縁部から口唇と器内面の上端5mm前後までとなるものが多い。また「三足鉢」では脚部の付け根に環状となるものや脚部全体が彩色されるものもある。さらに鉢の内面に「絵符号」の書かれたものや液垂れのあるものがある。「絵符号」は十数種確認されている。この点では、出土した遺物としては無いものの、筆状のものによって彩色された可能性を指摘できる。

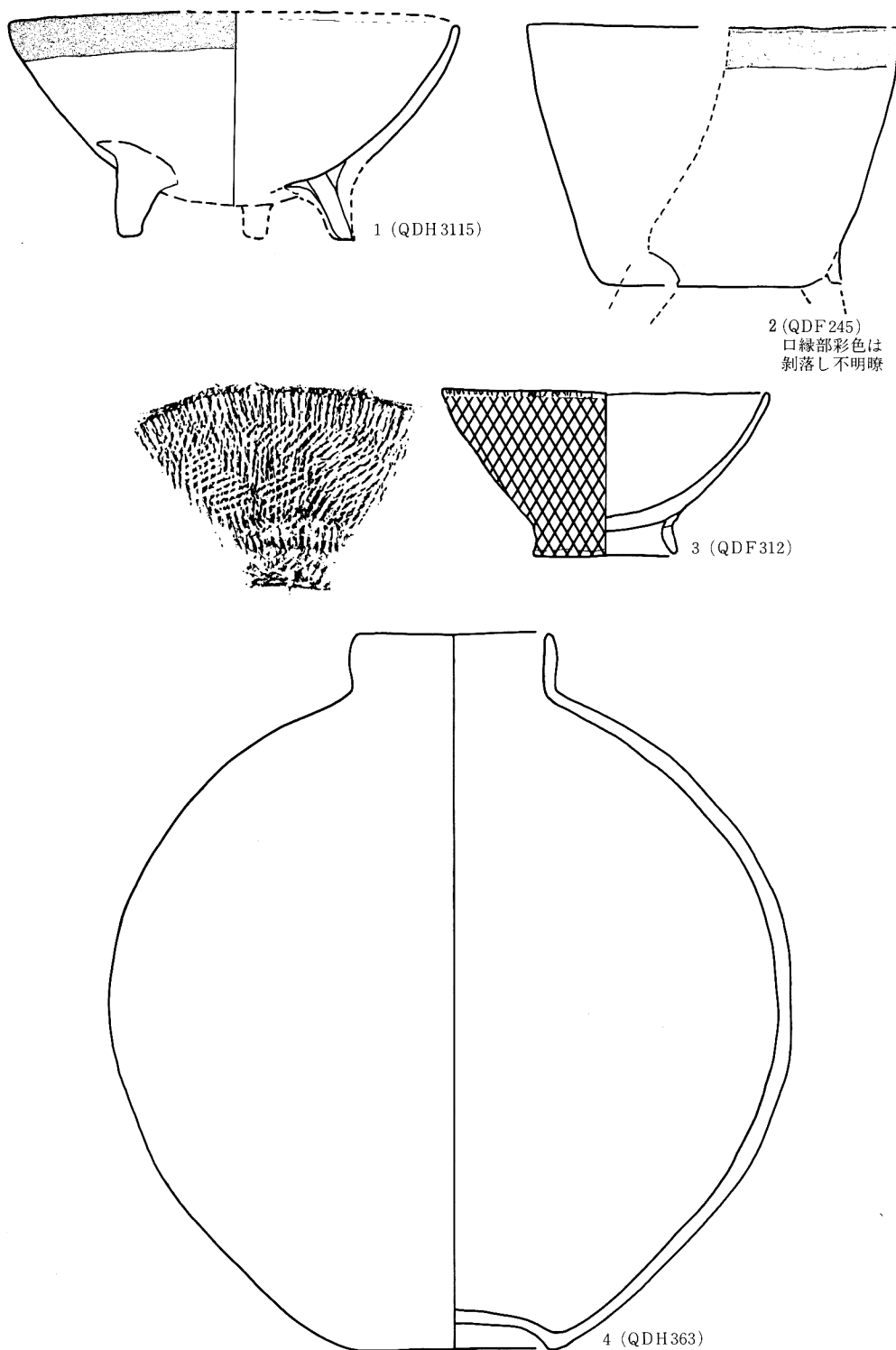
ところで、わたしは整理室で、165点の該期の土器を実見させていただいた。多くは大きめの破片から全体が復元されたものである。破片資料については不明であるが、観察した資料は一応土器群の傾向を反映しているものと思われる。以下に個々の器種について見ていく。

圓底鉢 丸底の浅鉢形を呈する。口縁部を無文帯とし、その下は底部まで交叉縄文が施される。なお、口縁部の無文帯は丸棒状の工具で横方向に調整されている。調整の際に体部の交叉縄文を削っている部分も見られる。口縁部形態が2種類ある。第5図1のように口縁部が体部にスムーズにつながるもの(1類)と、第5図2のように口縁部が湾曲して体部との境に陵をなすもの(2類)である。前者では口縁部の幅が狭い傾向がある。大きさには大中小のものがある

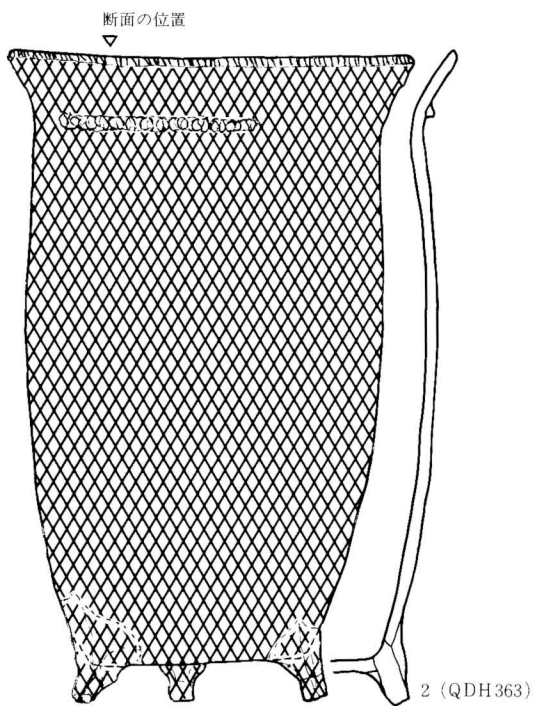
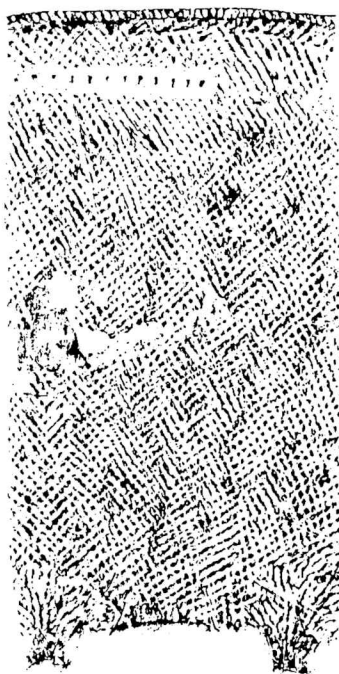
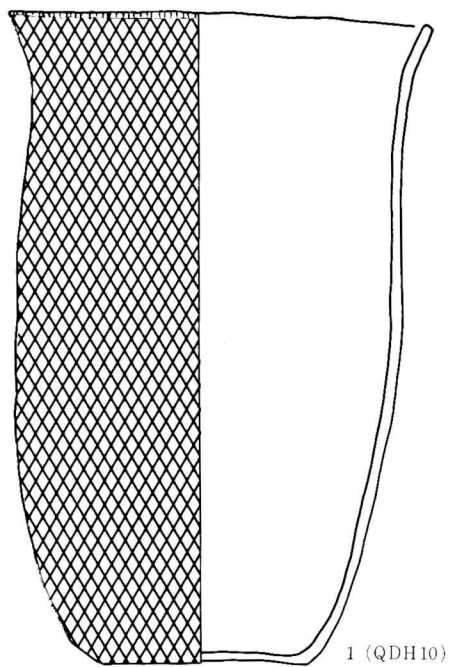


第5図 大地湾一期の土器(1) (縮尺1/3)

が、口径と器高の比率はおおむね一定であり、器高を1とすると口径が2.7前後になる。口径22cmから27cm前後には、口縁部形態の2者が混在するが1類が多く、27cmを越えるものではほとんどが2類である。口縁部無文帯が彩色されるものは、両者にあるが量的には2類が圧倒的に多い。口径が22cm未満のものは少なく、口縁部形態は1類のものである。このより小さいもの



第6図 大地湾一期の土器(2) (縮尺1／3)



第7図 大地湾一期の土器(3) (縮尺1/3)

は「圓底碗」と呼称される。

三足鉢 圓底鉢に3本の脚を付けたものである。基本的に口縁部を彩色する。口縁部形態は圓底鉢と同様の2種類あるが、2類のものは少ない。体部は無文となるもの（第6図1）と交叉縄文の施されるものがある。後者は少なく、口径の大きいものである。器の身の部分の口径と高さの比率はおおむね一定である。口径に着目すると18cmから23cmのものが非常に多い。25cmから27cmのものと29cmから32cmのものはそれより少なくほぼ同程度の量である。なお、三足鉢ではあるが、身が平底のものが1点（第6図2）、口縁部を欠き全体は不明（丸底で体部には交叉縄文が施される）であるが身の部分が深くなるものなど特異なものもある。

圈足碗 器形的には圓底鉢に環状の台部をつけたものである。口縁から底部及び台部まで交叉縄文が施され、口唇部が刻まれているもの（第6図3）と、口縁部が無文帯となり口唇部の刻みも無いものがある。彩色されるものは無いようだ。また口縁部が無文帯になるものでも、その形態は圓底鉢の1類のみである。やはり、器の身の部分の口径と高さの比率はおおむね一定である。口径では14cmから21cmのものが圧倒的に多い。「碗」の呼称が付く由縁であろう。他に口径23cm以上のものがあるが、これはほとんどが口縁部が無文帯となるものである。なお、台が付くか不明であるが、口唇部を刻み口縁部から交叉縄文の施されるもので、口径12cm前後のより小さいものも2点ほど実見した。

深腹罐 深鉢形を呈するものである。口縁部が外傾し、体部は頸部と最大径の差の小さい寸胴形で平底の底部となる。体部には交叉縄文が施され、口唇部も刻まれる（第7図1）。体部に隆帯が付くものもある。また二次加熱を受けた痕跡を残すものもあった。大きさについては完形の個体が少なく明瞭ではないが、高さが22cmから27cm前後のものと30cmを越えるものがある。実見した最大のものは口径20.8cm、高さ37.3cmであった。

三足罐 深腹罐に3本の脚を付けたものであり、深腹罐に類似する。第7図2は隆帯の添付されたものである。なお、土器焼成後に底部が穿孔されたものが6点あった。大きさについては、器の身の部分の高さが16cm前後のもの、22cmから25cm前後のもの、29cm前後のものがあり、中位のものがやや多い。

球腹壺 口径が小さく、頸部が直立する。口縁は平坦である。体部は球形を呈し、やはり径の小さな底部となる。底面が丸く凹む。全体が無文である（第6図4）。3点実見したが器高32cm前後、口径8.5cm前後で大きさは近似している。

小型の土器 口径・高さが10cm以下のものである。実見した総数でも15点程度であり、上述の器種から除外した。場合によって副葬品であると説明されることもあったが、明確に該期のお墓から出土しているものは2点である。手づくねで成形されている。器形では浅鉢ないしは碗形のものが多く、これには平底のものもある。他に鉢形のもの・三足の付く広口壺のようなも

のもある。

以上の大地湾一期の土器群のうち、圓底鉢の1・2類^(註9)についての時期差が指摘されている。遺構の方で、北頭位となる土坑墓が3例あることにふれたが、これらの遺構には彩陶を伴わず、より古い段階にあることが根拠のようである。その土坑墓から出土した破片資料についてはあたるができなかったが、一つの土坑墓に副葬された土器は圓底鉢の1類である。鉢形を主とする土器群の内、圓底鉢の2類や三足鉢の口径の大きいものに彩陶が非常に多く見られることと、仰韶期の彩陶へのつながりを考慮すれば、圓底鉢の1・2類についての時期差は指示しうる。ただし、すでに見てきたように土器群の器種組成は複雑で、その組成の変遷については今後の課題である。また、こうした複雑な土器群の内容からは、さらに古い土器群があったことも予想され、今後の発見が期待される。なお、中国の同時期の土器群との関連としては、黄河中流域で裴李崗・磁山文化にある三足器^(註10)や長江上流域の湖南省彭頭山遺跡の土器^(註11)などがあるがこれについても今後の課題としておく。

むすびにかえて

平成6年11月9日、私は大地湾遺跡を見学した。河岸段丘部分の調査区（Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区）は煉瓦塀で囲まれており、中には小さな入口を通して入った。調査された遺構は既に埋め戻されていた。1軒の住居跡だけが簡易小屋を覆屋として、調査時点の状況で見学でき、他に2軒が復元されていた。一方山の中腹には、村に向かって進むと途中からでもわかる体育館様の建物がある。F901を保護・公開するための建物である。段丘面から歩くと決して緩くはない斜面を登る。中国の農村では良くみられるように、山は段々の畑に造成されていて、切られた地層中には、遺物包含層や遺構の断面が観察できた。Ⅱ・Ⅶ区の間から登りはじめ、細路を通してⅨ区。この北側下方の段丘部分が河の侵食によって大きく湾曲している。これが大地湾の地名の由来という。そしてⅤ区。Ⅴ区から斜面下方のⅩ区を通る線が遺跡の中心線となり、F901のような大型の遺構が存在する可能性があるという。F901の覆屋は完成していたが内部はちょうど整備をすすめているところ。遺構はビニールシートで保護されていたが、シートの中に潜って遺構にふれさせていただく。「白灰面」の冷たい感触が手に残った。覆屋を出て、建物の裏に回るとまさに清水河の流域が一望された。案内してくださった郎先生が、仰韶晩期が既に社会的に発展した段階であることを主張される理由が瞬時に理解される眺望であった。

ここまで報告したように、大地湾遺跡について特に重要な点として、①一期の土器群の中に彩陶の発生が見られること。また土器の器種組成などの先仰韶文化段階の豊富な内容が明らかにされること、②仰韶早期の集落の変遷状況についての資料が提供されること、③仰韶晩期のF901の存在が、周辺集落まで含めて統治するような社会の発展状況をうかがわせること、が

挙げられるように思う。現在進められている本報告へ向けた作業の順調な進展を祈っている。

最後になりましたが、研修ではたくさんの中国の方々にお世話になりました。中でも齊寶玲国際交流室長・初世賓博物館長・謝駿義考古所長・郎樹徳先生・王琦氏には特に感謝申し上げます。また、今回の研修の機会を与えていただきました橋本顕信県教育長・河辺征夫文化課長・富樫泰時埋蔵文化財センター所長ならびに研修にあたって種々お手数をお掛けしました県国際交流課の青山鈞課長・渡部道子氏・土門啓介氏、研修の準備段階から研修期間をとおして御支援いただいた庄内昭男埋蔵文化財センター課長補佐はじめ埋蔵文化財センターの皆様心より感謝申し上げます。なお、この報告にあたっては小林克氏・小柳美樹氏より御助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

註

1. 秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報12』1994年
2. 秋田県教育委員会・甘肅省博物館『中国甘肅省文物展』1990年
3. a 甘肅省博物館・秦安県文化館大地湾発掘小組「甘肅秦安大地湾新石器時代早期遺存」『文物』1981年第4期
- b 張朋川・周広済「試談大地湾一期和其它類型文化的關係」『文物』1981年第4期
- c 甘肅省博物館・秦安県文化館大地湾発掘組「一九八〇年秦安大地湾一期文化遺存発掘簡報」『考古与文物』1982年第2期
- d 甘肅省博物館文物工作隊「甘肅秦安大地湾第九区発掘簡報」『文物』1983年第11期
- e 甘肅省博物館文物工作隊「秦安大地湾405号新石器時代房屋遺址」『文物』1983年第11期
- f 甘肅省博物館文物工作隊「甘肅秦安大地湾遺址1978至1982年発掘的主要収获」『文物』1983年第11期
- g 郎樹徳・許永杰・水濤「試論大地湾仰韶晚期遺存」『文物』1983年第11期
- h 甘肅省文物工作隊「甘肅秦安大地湾901号房址発掘簡報」『文物』1986年第2期
- i 甘肅省文物工作隊「大地湾遺址仰韶晚期地画的發現」『文物』1986年第2期
- j 新人物往来社「仰韶文化の原始集落 大地湾遺跡」『歴史読本』1987年7月号
- k 秋山進午「仰韶文化の遺跡」『古代中国の遺産』講談社1988年 など
4. 註3のk参照
5. 鳥の抽象化した形ともとらえられている
6. 註3のh参照
7. 中村慎一「中国考古学80年代の重大発見（訳者解説）1. 古人類～新石器時代」『中国考古学の新発見』雄山閣1990年
8. 秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報13』1995年
9. 張朋川『中国彩陶図譜』文物出版社1990年
10. 註4に同じ
11. 湖南省文物考古研究所・瀏陽市文物管理所「湖南瀏陽彭頭山新石器時代早期遺址発掘簡報」『文物』1990年第8期